九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

明治期三菱端島坑の形成過程に関する研究 : 端島から軍艦島へ

中村, 享一

https://doi.org/10.15017/1789440

出版情報：九州大学, 2016, 博士（芸術工学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

（様式６－２）

氏　　名	中村　享一
論　文　名	明治期三菱端島坑の形成過程に関する研究～端島から軍艦島へ～
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　藤原　惠洋 副　査　　九州大学　　教授　　包清　博之 副　査　　九州大学　　名誉教授　石村　眞一

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

平成 28 年 11 月 2 日（水）午後４時 30 分より午後６時にわたり４号館４１１教室において、本提出論文に関する公聴会（最終試験・学力の確認）を開催した。主査は環境デザイン部門教授藤原惠洋、副査は環境デザイン部門包清博之教授ならびに片野博名誉教授がつとめた。参加者は延べ 28 名であった。

まず主査は参考論文２編「明治期における端島坑（通称軍艦島）の成立と展開に関する研究～埋築と建造物の変遷を通した産業技術史的分析～」『産業考古学　第 150 号』(平成 25 年 12 月 20 日)、「A Study on the industrial productivity and urban infrastructure maintenance of Gunkanjima（軍艦島の工業生産性と都市基盤整備に関する研究）」『EAROPH 2015 Regional Seminar』（平成 27 年 6 月 2 日）を確認、及び提出論文を回覧に付すこととし、続けて発表者は PPT を用い口頭での発表を４０分にわたり行った。

すなわち本論文は、近代日本を代表する炭鉱として重要な役割を遂げた長崎の高島炭鉱および枝坑としての端島坑に着目し、とくに端島坑の明治期形成過程を明らかにしたものである。近年、ユネスコ世界文化遺産に登録されながら、適切な保存管理が大きな課題とされた端島炭坑は、これまで先賢たちによる先行研究の多くが大正期以降の都市形成過程を明らかにしており、本研究はそれ以前の前史とも言える幕末から明治期に至る形成過程に対象を絞り込んでいる。まず旧来の史料と新史料による検証を重ねながら幕末期から明治期端島の埋立事業の変遷に関する検証を行い幕末からの初期経営資本による端島炭坑の黎明期形成過程を論じた。その後、明治 20 年代から三菱資本による大規模な高島炭鉱経営が始まると、海底炭田の出炭・選炭と搬送を担う端島炭坑施設として生産性を向上させる必要と、厳しい海上の自然禍へ対峙する端島全体を護岸や鉄筋コンクリート構造による居住施設の整備を通して強靭化する必要から、埋築と基盤施設の整備を重ねいく過程を論じた。さらに明治 30 年代より納屋制度廃止から炭鉱労働の近代化に伴い、労働者住居の整備と都市化が発展していく。さらに端島の炭鉱都市における近代建築の形成過程と、その背景にある三菱資本における鉄筋コンクリート構造技術の伝達導入経路を検証し、造船における船渠建設技術や倉庫建築の建造工事を通してもたらされた技術の足跡を明らかにした。　一方、三菱の建築技師達が西洋近代建築情報を取得して三菱の建築を造った経緯にも言及している。1916（大正 5）年以降、端島に初めての鉄筋コンクリート造の高層高密度の近代建築による集合住居が建設されて以降は、連綿と RC 造による環境整備が行われていったが、暴風災害のための強靭化と併せ、炭坑労務者の定住を促進するために近代的な建築空間が設けられていった。これが独特な高密度中高層集合住居によるシルエットの炭鉱都市を出現させることになったが、後に軍艦島と称されるようになった経緯であると明らかに

した。

以上、本研究では幕末から明治期に至る端島坑の成立と展開を跡づける中、明治期端島から大正以降、軍艦島と称された炭鉱都市の形成過程を俯瞰しており、三菱端島坑の形成過程を明らかにすることができる成果として高く評価されるものである。

よって本審査委員会は、厳正なる審査の結果、本論文は博士（芸術工学）の学位論文を得るに値するものであると判断した。